

—無いよ。スシ 有難う。もう少し一人でここに居よう。もし電話が来ても私はいないと
言って欲しい。

—分かりました。でも何か必要があったら私を呼んで下さい。

ペペは悲しかった、とても悲しかった。そして不思議に思った。《何が起ったのだろう？
何故私に何も言わなかったのだろう？どうしてあのような決断をしたのだろう？》

★ ★ ★ ★

午後にペペはヘススの妻に会いに行った、彼女もとても良い友達だった。彼女自身が丁
ドアを開けたところだった。互いに抱擁しテレサは涙をこぼし始めた。ペペは殆ど話をす
ることが出来なかった。

—本当にお気の毒、テレサ、君は事実を知っているのでしょうか。

—知っています、ペペ、知っています。有難うお出で頂いて。

家の中は友達と家族親族でいっぱいだった。ペペはしばらく留まって何人かの知り合いと
話した。すべての人がペペ同様彼が自殺をしたことを不思議がった。

—私が仕事から帰って来た時...

テレサは一度ならず何度も説明をした。

彼女はドアを開けた、すると強いガスの匂いに気付いた。家の中は全てが正常な状態で不
思議なくらい静かだった。普通この時間ヘススは家で仕事をしていた、タイプライターの
音か、音楽または何かが聞こえるのだ。ヘススを呼んだ、しかし答えは無かった。ガスが
どうしたのか見るために急いで台所に行くと、そこに彼を見つけたのだ、床の上に、彼は
死んでいた。

—何時に埋葬するのですか。 誰かが聞いた。

—明日の11時です。アルムデナです。(イスラム教寺院)

—多分、ペペが言った。検死はしたのでしょうか。